

## 星の王子さま

### 3

王子さまが、いったい、どこからきたのか、それがわかるまでには、だいぶ時間がかかりました。王子さまは、ぼくにいろんなことを聞くのですが、ぼくの聞くこととなると、いっこう、聞いているようすがありません。ひよいた拍子で、王子さまのいったことから、少しずつ、ことがほぐれて、しまいには、やっと、いろいろなことがわかってきたというありさまです。

たとえば、王子さまは、はじめてぼくの飛行機を見たとき（ぼく、飛行機の絵なんか、ごめんです。あんまりこみいってて、とてもぼくの手におえません）、こう、ぼくにききました。

「それ、なあに？ そのしなもの？」

「しなものじゃないよ。これ、飛ぶんだ。飛行機なんだ。ぼくの飛行機なんだ。」

ぼくは、鼻を高くしながら、鳥のように飛べる人間だといってやりました。すると、王子さまは、大声をあげていいました。

「なんだって！ きみ、天から落ちてきたんだね？」

「そうだよ」と、ぼくは、しおらしい顔をしていいました。

「へええ！ へんだなあ、そりゃ……」

王子さまは、そういって、たいそうかわいらしい声で笑いました。笑われたぼくは、とても腹がたちました。天から落ちるなんて、ありがたくないことなんですから。しんげんに考えてもらいたかったのです。やがて、王子さまはまたこういいました。

「じゃあ、きみも、天からやってきたんだね！ どの星から来たの？」

そのとたん、王子さまの夢のような姿が、ぼうっと光ったような気がしました。ぼくは、息をはずませて聞きました。

「じゃあ、あんたは、どこかほかの星からきたんだね？」

しかし、王子さまはなんの返事もしません。ぼくの飛行機を見ながら、しづかに首をふっています。

「そうか、じゃあ、そう遠くからきたわけでもないな……」

そういって、王子さまは、長いこと、考えこんでいましたが、やがてポケットから、ぼくが書いたヒツジの絵をとりだして、こんどは、さもだいじそうに、それを、じっとながめました。

どうやら、〈どこかほかの星〉のことを知っているらしい王子さまの口ぶりに、ぼくは、どんなにつりこまれたことでしょう。で、そのことを、もっとくわしく知ろうとしました。

「ぼっちゃん、あんた、いったい、どこからきたの。〈ぼくんとこ〉って、それ、どこにあるの？ ぼくのかいたヒツジ、いったい、どこへつれていくの？」

だまって考え込んでから、王子さまは、こう答えました。

「ああ、よかった。きみのくれた箱があるんで、夜になったら、これ、ヒツジの家になるよ」

「そうだね。それに、あんたがいい子なら、ぼく、綱もあげるよ。ひるま、それでヒツジをつないでおくのさ。それから、棒ぐいもね」

こういわれて、王子さまは、ひどく気にさわったようでした。

「つないでおく？ へんなこと、考えるじゃないか！」

「でも、つないでおかないと、どこへでもいつちまうよ、迷子になってさ……」

ぼっちゃんは、また、声をたてて笑いました。

「だって、どこへもいくとこ、ないじゃないか」

「どこへだってさ。まっすぐどんどん……」

すると、王子さまは、まじめな顔になっていました。

「だいじょうぶなんだよ。ぼくんとこ、とつてもちっぽけなんだもの」

そして、どこかしら、しずんだ顔になって、いいたしました。

「まっすぐどんどんいったって、そう遠くへいけやしないよ……」